

馬眼医療と「性観之書」

伊藤 一美¹

はじめに

本稿の課題は、(1)馬眼医療に関する史料所見の提示、(2)眼相による馬性判断書『性観之書』の紹介を行うものである。馬の眼病書に関しては既に獣医学史の古典的名著、白井恒三郎『日本獣医学史』(文永堂1944年。復刻版同1979年。『獣医学史』と略)で年代不詳の「眼病書」を一部紹介、さらに「御隨身三上記」〔永正9年(1512)〕に散見する馬医療を紹介されている。だが馬眼医療の歴史的背景がいつ頃からつくられてくるものなのかという視点では見ていない。¹⁾

馬医書に関する基本史料類としては松尾信一編『馬の文化叢書7馬学』〔馬事文化財団(1994年)〕に「馬医草紙」〔文永4年(1267)〕,「安西流馬医絵巻」〔寛正5年(1464)写本〕,「馬医巻物」〔文禄4年(1595)〕などが所収されている(引用に際しては『文化叢書』と略)。²⁾ さらに、松尾信一ら校注・執筆の『日本農書全集60畜産・獣医』〔農文協(1996)〕では、前近代の動物医学史に関する著作・絵画史料を収録し、「安西流馬医巻物」〔天正7年(1579)成立、宝永7年(1710)写本〕,「万病馬療鍼灸撮要」〔宝暦10年(1760)〕がある。〔『農書全集』と略)。³⁾

本稿はこれら馬眼医療の医書に見える実態を明らかにして、その共通性から歴史的背景をさぐり、あわせて先の課題にせまるための一助としたい。

1 馬眼医療の諸相

馬眼医療とその処方：

(ア)「馬醫醍醐」〔天文20年(1551)成立、桑島仲綱著〕にみる馬眼症状

本書は桑嶋流の馬医書である。「熱と云は目のうら赤く白目に赤筋はり」(初第1・『獣医学史』62p)。記載部分は「七ヶ寒熱」項目にあるのでその症状から状況を判断したと考えられる。この寒熱とは「七ヶ寒熱 一眼、一耳、一舌、一唇、一毛、一ふぐり 是也、寒と云ハ目の色青、耳すばミ鼻しばミ舌ぬれ唇しばミすばミ、毛だちふぐりあがりすばむなり、惣体馬きよろよろとすくミて見ゆるなり、熱と云ハ眼あかく又ハ白く、同赤筋はり、耳たれ鼻ふきひらき、舌かわき唇ふくれ、

ITO Kazumi : Equine Ophthalmology and “Shokan-no-sho”

1. 鎌倉考古学研究所理事・葉山町文化財保護委員会会長

連絡先：伊藤一美 〒240-1111 神奈川県三浦郡葉山町一色553-18

(2015年11月20日受付・2015年12月20日受理)

毛身に付き、ふぐりさがるなり」(「良薬馬療弁解」巻4脈論之弁〔宝暦9年(1754)〕『文化叢書』88p)とあるように、充血もしくは白色の眼、赤筋の有無などでその状況を把握していた。

(イ)「馬医草紙」「馬医巻物」〔文禄4年(1595)〕にみえる馬眼症状と処方

これも桑嶋流の馬医書の一つである。症例として「目ひるおへる馬にハひてをさすへし」(「馬医草紙」第6・一葉相伝『文化叢書』488p)とある。「目ひる」とは目がしらに付く寄生虫様の一つであり(「万病馬療鍼灸撮要」眼病『農書全集』339p)、ひて(松脂)をその目につけることで治療する。

また次の症例はさらに細かい処方が示される。

「眼久敷煩申すには薬二度ばかり飼申候、又其後薬をさし、がん脉(眼脉)、さうこう(相好)より血をとり申候、また別の打目など候はまづ、さうかう、眼脉をさして目の内を能々冷し、其後薬をさして摠て諸々の目の煩、御養生には針にても又薬をささせられ候にもいかに朝はやくれうじ(療治)申候、故を申にまなこは収(おさめ)のごとくに候あひだ、いゆる事を本とす」(「馬医巻物」巻7馬の摠口伝・目之薬飼事『文化叢書』492p)。

この書は、奥書によれば文禄4年2月5日に実秀なるものが「桑嶋右衛門尉仲綱、鈴木主膳介道重、水沢清五郎」から伝えたものを青柳与六郎に進覧させたものである。桑嶋流系統の馬医書で、既に白井氏『獣医学史』では「文禄四年の馬療書巻物」の項目にあたる史料である。

その処方薬は薬を投眼し、さらに眼脈(耳の根より弦りたり血筋「良薬馬療弁解」)と相好(眼の血筋「同」)に鍼をさして瀉血する処置が特色である。

また次の症例もその処方が特徴的である。

「盲眼と云は俄にまなこ白くなりつぶるる也、薬に云、一土龍のはい(灰)、一はつ少七度毒をとりて、一とびの糞のしろみ細末してとり、口伝、治法云、かふらな(蕪菜)を目のなかに切て薄く気づりてをし入、手綱にてゆいておくもよし」(「馬医巻物」巻8下法七ヶ条之事『文化叢書』494p)。

注解によれば、土龍とはモグラを示し、これを黒焼きにしてごま油と混ぜる。イボ、痣、内服では強壯剤、排膿剤となるという。さらに蕪菜を眼につけることは、これも『良薬馬療弁解』〔宝暦9年(1754)〕に受け継がれており、中世後期には治療法として定着していたことが知られる。但しそれは同書に馬商の口伝ともいわれているように(『文化叢書』105p)民間の処方といえるだろう。

こうした処方は「万病馬療鍼灸撮要」〔宝暦10年(1755)〕では、「眼病」の項にも「目ひる」「ほうふり虫」「そこひ、うはひ」に関する治療法としてが記されており、特

に「ほうふり虫」の処置には、蕪葉をすりおろしてよく燻してからその汁で洗うこと、その後熊の胆をさすことなどとなっている(『農書全集』339p)。

このように当時、眼病に関する共通の処方があったことを示すものといえる。なお「ほうふり虫」の処方に関して中国で成立した「新刻針醫參補馬經大全」(14世紀成立)に眼中にいる混睛虫の除去法として初秋に針を虫の入る部位にさし、水(房水)とともに出す、とある(『獣医学史』20・52p)。こうした処方は中国から日本に持ち込まれたとしてよいだろう。

(ウ)「良薬馬療弁解」にみる馬眼医療

本書は宝暦9年(1754)4月執筆、寛政8年(1796)10月版行、京都御幸町御池下、菱屋孫兵衛発行である(『文化叢書』解説)。その特徴は季節による五蔵分類で、春の項目に「三月肝臓旺ず、左賦味酸、此臓通胆、臟腑共に体木なり、通眼筋爪、故に口中青き病、肝に有て治しがたし、変じて黒色なら治すべし」(28p)とある。また「胆は眼を主どり、心ハ耳を主どり、肺は鼻を主どり…」(29p)とあることから基本は五蔵を配置する五行思想を背景に持つ。

針灸の技術と眼医療：

馬療には鍼を多く用いる。「針を行う馬を医せんに先肥瘦喫草の多少を見、然後皮に針せば肉を傷ることを得ず」、「頭…竹葉三部指 眼脈二分破」(針灸穴浅深の異31p)などと処方が示される。竹葉とは耳の中で、眼脈とは眼脇のツボを示す。さらに「相好ハ眼の血筋、針を刺す事二分、血五合を長とす、上熱の馬涙を流し、目ひる出並一切眼病を治す」(同針之考弁34p)、「眼脈ハ耳の根より弦たる血筋、針を刺事二分、血二合半を長とす、一切の眼病を治す」(同35p)と詳しい。なお相好とは眼下の筋のことである。

症状への注意：

処方直前直後の経過もまた重要であった。「或ハ涙痕又滴泪、涙の旋挾災ありて患(うれへ)絶ず眼下ニあり」(眼水乃旋52p)。「七ヶ寒熱 一眼、一耳、一舌、一唇、一毛、一ふぐり 是也、寒と云ハ目の色青、耳すば鼻しばミ舌ぬれ唇しばミスぼミ、毛だちふぐりあがりすばむなり、惣体馬きよろよろとすぐミて見ゆるなり、熱と云ハ眼あかく又ハ白く、同赤筋はり、耳たれ鼻ふきひらき、舌かわき唇ふくれ、毛身に付き、ふぐりさがるなり」(巻4脈論之弁88p)とある。

ここにみる「寒」について、文禄4年(1595)成立の『馬医巻物』巻5「薬之加減之事」第6条に「寒の馬にはひる薬をかふ(飼)べし、熱の馬にはまつ薬をかふべし」(『文化叢書』484p)とあるので、既に中世後期にはこうした症状への「寒熱」対処法が生まれつつあったことがわかる。しかし「ひる」「まつ」の意味は不詳である。

眼の外形や瞼への注目も重要である。「眼の病は血病也、下焦虚して上実し、心の血、頭に上り、是をなすうち目つき、目ハ邪病也、無目ハ肝の虚也、腎の居(虚カ)によって上実し、これ眼病となる、故に腰なへ、尻股痛あるひハしびれ、筋つりいたみ、病といへども肝たしかなれば眼晴也、腎水つくる時ハ目あきらかならず肝の虚熱つよき時ハ目高くなり、黒眼へかかり物出、目ひるのごとくがんぎのようなるもの出也、又内羅(肺の風邪)よりをこる目ハ細くなりて見張おもたく自然目しばむようなり」(巻5眼目98～99p)。

こうした症例には「蝸牛を手の腹にてすりつぶし、まぶたの上よりなづれば翌日より目白くなる也、又かぶらを目のなりにきりて目にしかとあて、馬に鉢巻させておけば平癒する也、右いづれも馬商のなすわざにして非道いふばかりなし、此あかり目にする事ハ間々有事なれば記之」(巻5馬の眼目をたちまち白くする事105p)とその対処法が示されている。

処方眼薬：

当時の処方薬(鉱物薬)について、以下列記しよう。

辰砂(丹砂)「心肺を温め眼を明にす」(同巻3)。硃甘石(先生)「味平なり焼いて用ゆ、眼赤熱甚多く翳(まけ)多きに用ゆ、陰に瘡生ずるによし」(同)。真珠(珍宝)「味酸寒也、内障外障(そこひ・うはひ)、翳ある眼に吉」(同)。石決明(九孔螺・にな貝)「味辛平なり、内障外障翳をさり、ただれ目、何の眼病をも治す」(同)。決明子「味苦石鹼寒也、炒て用、身を軽くし眼を明らかにし翳泪の出る馬によし」(同)。

このように症状とその投薬が具体的に示されていることも重要である。

(エ) 桑嶋秀忠「病馬俗解集」[天明6年(1786)成立]にみる馬眼症状と処方

「虚眼と言ふは目の内はつき青すぢ強く小粒なり、実眼とは目の内赤く、眼胞はれ涙多く出るなり、内障(そこひ)は虚眼、外障(うたひ)は実眼と知るへし、うち眼は実眼の如くに腫れ、黒玉に霞かかり或は強く打ちたる所目玉に当れば目玉の内より赤紫の色の所あり、外障となるなり」、「目蛭と言ふは大眦(まがしら)より瞳の子の方へ蛭の如くのもの出で目をすりよつて霞かかり目開きがたきものなり」、「振虫と言じは白き糸の如くに五分ばかりなる虫、白眼の方よりくろまなこの内に動き出で、又白眼の内へかくれ間もなく出入するものなり」(『獣医学史』99p)。

本書の処方薬は薬草類(シャクヤク、キキョウ、カンゾウ等多数種)を粉末や煎じて投薬処置することが特徴といえる。

(オ) 書名、成立年不詳「馬の眼病書」にみる馬眼症状と処方

本書は中国医療を基礎にしている。「それ馬祖は龍にして天地の水を飲で馬を生ずると雖も生ありて言なし、故に内障黒花の物を見分ち難し、特に青白・穀量・

翳幕・寒熱・虚実をみて針葉膏淋の四を極め，応に須く療治すべきものなり」(『獣医学史』91p)とあり，馬眼の構造を五輪図で表現する。赤く痛む(肝の熱)，眼がしらが赤い(心の熱)，まなじりが赤い(心虚)，泪が多い(肺虚)，そこひ(腎虚)などの事例を示し，その治療は鍼である。

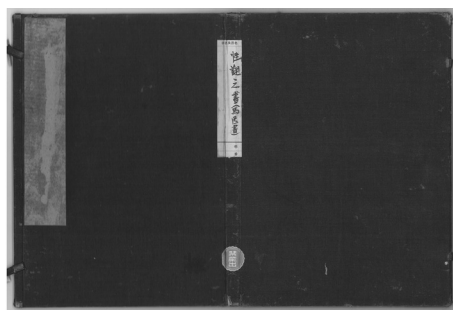
小括

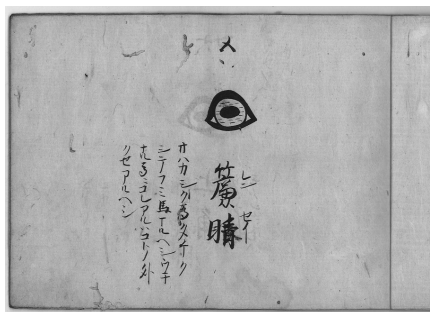
以上，数種類の馬医書を通覧して，①その基本は眼色変化を「寒熱」及び五行思想で説明する視点をもっていることが共通する。②「目ひる」「ほうふり虫」「そこひ，うはひ」等に関する馬眼の外観症状の把握とその治療法に特徴があり，鍼と燕，投薬処方との共通性が見られることが知られる。そのいずれもの医療知識と技術が桑島流に統合されている。

2 「性観之書」について

本書の概況は次のようである。

- ・所蔵者 研医会図書館(同館安部郁子氏より小佐々学博士を通じて写真提供)⁴⁾
- ・現状 帙入り。表紙背表紙に「性観之書」(馬医書)の貼紙。本書は写真判断では楮紙風。本文表紙に墨書「性観之書」とある。墨付19丁。本文3表から記載，17オに馬絵に辻図記載。本文は漢字カタカナ交り体。





(本書の伝来)

墨付16オ(表)部分の記載に「斯一卷，雖為我家之秘術，執心難默止故，不遺一事モ著紙上，以付属之者也，自今以後覽莫致妄漏他人云爾」とある。内容は「この書は『我家の秘術』として伝えてきたもの。しかし(受伝者があまりにも)執心が強くて熱心なのでこれまでのことを一切残さず，(貴殿に)付属させる。これから以降は秘術を他人に漏らしてはいけない，あなたに伝える」ものであった。しかし本書の成立年や具体的収受の過程については不明である。

本書の基本は馬眼の状態によりその馬の気質や性格を判断するものとみてよいだろう。以下具体的にそのおもな実例を簡条書きに示していく。

- 「精眼」(3オ)は馬眼の正常な状態を示すもの。
- 「簾晴」(5オ)は白眼中に点が多数ある。すだれのような様子。説明には「サハカシク，馬タケクシテ，フミ馬ナルヘシ，ウチナル馬ニコレアル，コトノ外クセアルヘシ」。かなり荒い馬の状況を示す。
- 「上角」(5ウ)は「シャウカク」「ウハカト」ともよぶ。「モノヲシル」，状況判断がよくできるの意味か。眼は丸くてはっきりとしている。
- 「希眼」(6オ)は「キガン」。「カハク，アキラカ，ヒカリ，ヒガワ付」，「イカス，亦ハキレナトシテ，百クセアルヘシ」。歩行や暴れるなどして癖のある馬を示すか。
- 「鼠晴」(6ウ)は「ソセイ」。「キレイカス，百クセアリ」。この特徴は「タマサヘ上ニヒカリアリ」とあるように眼の上は少し光がある。やはり癖のある馬の一つ。
- 「皺顔」(8オ)は「スウカン」。「カホノシワ，カホノシワヒタリ」にあるのが特徴。「ケムヌクシカミイカス，キレタチトマリ，但ツヨキクセハナシ」。行動は注意がいるが強い癖はないという。
- 「下顎」(8ウ)は「ケシ」。「シハニマエニアルハクルシカラス，ウシロニアルハ，イカスナリ」。皺の特徴による性格判断を行っている。

- 「胎鉛」(9オ)は「カンシャウ」。「イカニモ子ハク、トロキモノナリ、シワトキ心アルヘシ、此心ヨハシ、クセアルヘキカ」、「マナブクロマル」。瞼が二重のように見え、怖くみえるが、行動は鈍い様子の馬である。
- 「虚眼」(9ウ)は「キヨガン」。「子ハクウチニナマリモノナルヘシ」「ウツケマナコ」ともあってあまり行動的な馬ではない。
- 「油潤」(10オ)は「ユジュン」。「タマノウチ、ニコリテトシテ、ウルライアフラ、ノコトク子ハクアルヘシ、色ノクセアルヘシ」。眼に潤いがあるのが特徴。しかし性が荒い様子。
- 「浅軽」(11オ)は「センケイ」「アサテカルイ」とも。「コレハ右両センニ同シ、但コノセンケイニ上中下アリ、セイガンノクライイタラスハ、センケイノ上ナリ、下ト云時ハコノセンケイコノ色ハセンケイ、上中下アリ」。この眼の特徴は輝きが無く、力が無いように見える馬である。
- 「濁力」(11ウ)は「ショクリョク」「ニゴリヲチカラ」とも。「是ハタマノ内トシテ目ノ上マフタ少ヲモク見ユル、又子タミアルヤウニニラミアルハ、ユルスヘシ、イツレモ乗ココロヲモツテサトルヘシ」。上瞼が重く見えるような特徴がある。
- 「上一文字」(12オ)。「心ヲモクサヘカシノ上見テハコレナシ、子ハタヲモキ心ナリ」。瞼の上に筋がある馬。動きが緩慢の馬ことか。
- 「下一文字」(12ウ)。「是ハ人ヲクイ候ニキワマリ候ナリ」。目の下に筋がある馬。かなり気性が荒い様子である。
- 「鈍晴」(13ウ)は「トンセイ」「ナマガ子」とも。「エズノコトク、マナコ大キナルハアシ也、然間マナコ大キナルハ惣別ニキロウ也、コツソナルヲホントス」。「ニフシ、ヲソシ、モトカシ」。目玉が総じて大きい、あまり利口ではないようだ。

口伝：(14オウ)

「一、息之不行之事、八十二口伝アリ、一、非息之体息荒り曲有之事、腹中ニ痛アリ、一、息尋常ニシテ曲有ハ筋気血切、折目瘡楮向身之痛ヲ以テ曲有之事、一、人喰骨之事、一、鉢肉之次第 上中下品多シ、一、眼合校之外 高キ口伝、一、顔同目相之図之口伝、一、眉間之辻 上中下三段之図、口伝、一、前起左門之辻之次第 凶(イム)、一、後起右門股ニアリ 凶、一、芝引之辻、皮腹アリ、繁ク病、一、園之辻、取髪之辺ニアリ、乗人愁有リ、一、矢負之辻百会ニアリ、必修羅場ニテ手ヲ負、一、笠之福、是モ愁アリ、一、見上之辻、目之下ニアリ、泪ノ辻ト云説アリ(以下略)」。

この部分には口伝として馬の部位を示す言葉とその扱い、吉凶について記載されている。但し内容説明はほとんど記載されていない。

その次には「辻」の名だけ掲げている。それを列記する。

「猿登之辻」(後股), 「積之辻」, 「老之辻」(顎下), 「六道(陸道)之辻」(鞍下), 「所地之辻」(目筋上), 「福門之辻」(吻), 「入都之辻」(喉), 「フクサウ(福相)之辻」(鍔下), 「労相之辻」(鼻), 「跛功之辻」(尻合), 「小門之辻」(胸腹), 「カケワケ之辻」(爪), 「シモクノ辻」(眉間), 「竹葉之辻」(耳), 「片身」「片間」「片三津」「雲間之辻」(腹),

これら様々な「辻」について、その部位を簡潔に示している。「辻」とは「旋」(つむじ)の意味であり、それによって吉凶を判断する口伝がある。『良薬馬療弁解』によれば「辻は自然の見分又ハ呪事と同意なれば其主の氣に従べし」(辻吉凶の賦)とあって、馬の持主の氣(威勢や意向)に従うべきで吉凶とは関係ないと指摘していることも注意すべきものである。

むすび

以上述べてきたが、馬眼医療の始まりは明確には把握できないが、記録された文献では戦国末期からとなっている。その処方には既に関係者間では秘伝としての扱いとなっていた。また馬商人間の処方も取り入れられていることも明らかである。こうした馬医療関係者の中心が桑嶋家であった。

このような医療技術と伝統を受け継いで、特に馬眼とその変化に特化して医療処方を記したものが「性観之書」であり、それは伝書としての性格を付与されて作成されたものである。

謝 辞

本書「性観之書」を所蔵される研医会図書館 安部郁子氏のご配意により、写真のご提供と一部本刻の許可をいただき、さらに日本獣医史学会理事長 小佐々学博士には史料所在と参考資料等のご指導いただいたことを感謝します。

文 献

- 1) 白井恒三郎：『日本獣医学史』文永堂(1944)・復刻版同(1979)
- 2) 松尾信一編：『馬の文化叢書7馬学』馬事文化財団(1944)
- 3) 松尾信一・白水完児・村井秀夫校注・執筆：『日本農書全集60畜産・獣医』農山漁村文化協会(1996)
- 4) 公益財団法人研医会・研医会図書館：東京都中央区銀座5丁目3-8